

フェージャかえっておいで

ヴォロンコーワ 作
西郷竹彦 訳



世界の子どもの本

世界の子どもの本・2

フェージャかえっておいで

リュボーフィ=ヴォロンコワ原作・西郷竹彦訳

N. D. C. 983 偕成社 昭和41年 192 P. 23cm

Воронкова, Л. : ФЕДЯ И ДАНИАКА, 1958.

発行

京都新宿区市ヶ谷砂土原町二の四

オフセット・本文印刷

株式会社 偕成社

製本 文勇堂製本工業株式会社

©

発行

昭和四十一年五月二十日

定価 三百九十円

訳者 西郷 竹彦

発行者 今村 広

印刷者 北島 織衛



フェージャかえっておいで

|||||

■ リュボーフィ＝ヴォロンコーワ作／西郷竹彦訳



ФЕДЯ И ДАНИЛКА

А. Воронкова

1958

Государственное Издательство Детской Литературы
Министерства Просвещения РСФСР Москва

* はじめに

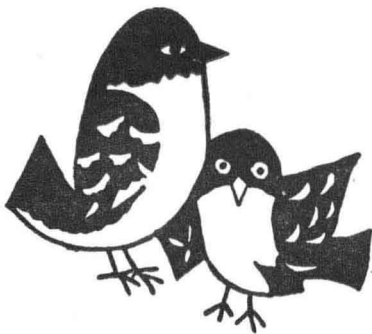
みなさんは、クリミアという地名をきいたことがありますか。ソビエトの国の南の、黒海という、ひろい海につきでている半島です。この物語の主人公、フエージャとダニールカは、この半島の海ぞいの小さな村にすんでいます。

フエージャは、馬のすきなげんきな男の子です。ダニールカは、花のすきな心のやさしい男の子です。でも、ふたりはともなかのいい友だちでした。

ある夏の休み。しあわせだったこの村に、たいへんなできごとがおこりました。フエージャとダニールカは、どうなるでしょうか。

よんでいくと、あかるくたのしいけれど、なみだもでそうになる物語です。

西郷竹彦





著 者 紹 介

原作者 ヴォロンコーフ 1906年、モスクワに生まれる。少年少女雑誌「ビオネール」の記者や、新聞記者などをしてから、子どものための作品を書きだし、現在ソビエト作家同盟の会員。

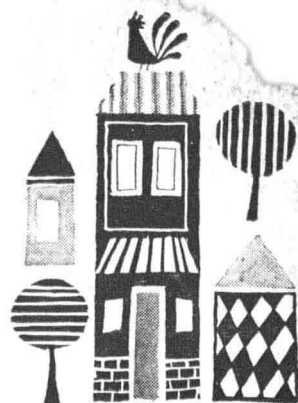
訳者 西郷竹彦 1920年、鹿児島県に生まれ、東京大学応用物理学科を卒業。ソビエトに6年あまりいて、文学・教育学を研究。ロシア文学の翻訳紹介や、文学教育に関する著書が多数ある。



ついに水がふきあがりました。みんなはうれしくて、おどりだしました。

フ
エ
ー
ジ
ャ
か
え
っ
て
お
い
で
●
も
く
じ





フエージャとダニールカ…… 12

友^{とも}だちなんか知らない…… 30

谷^{たに}間のあらし…… 39

ダニールカのしっばい…… 55

水がでない…… 75

大山のいずみ…… 83

水はどこにでもある…… 95



歯^はのついたパイプ……… 108

オレンジいろの石^{いし}……… 117

石^{いし}をさがしに……… 136

フエージャのしんぱい……… 147

おわかれ……… 160

水がでた！……… 171

解^{かい}説^{せつ}……… 188



表紙・口絵
さし絵
見返し・扉
目次カット

箕田源二
修
み
た
げん
じ
ろう
おさむ

フエー
ジャ
かえつておいで

ヴォロンコーワ
西郷竹彦 作



フエージャとダニールカ

フエージャとダニールカは、クリミア半島の、海ぞいのある村にすんでいます。

村のうしろには、山がせまっています。

いちばん高い山は、てっぺんからふもとまで、びっしりと木がしげっていて、まるで、大男のかぶる毛むくじゃらな、まるいぼうしのようなです。ところが、そのとなりの山は、まるつきりちがいます。によつきりとそびえるはげ山で、そのてっぺんは、するどいのこぎりのほのような、ぎざぎざな岩です。峰をみあげると、はいいろがかってみえたり、うす青く、また、うすむらさきにみえたりしました。なかでも、いちばんするどくそびえている峰は、にんげんのすがたににているので、巨人の岩とよばれ、人が岩にこしをかけ、あたまをたれて、なにかかんがえこんでいるようにみえました。

でも、そうみえるのはダニールカにだけで、フエージャは、

「あそこには、にんげんなんていやしない。ただ、岩のかたまりがあるだけなんだ。」



と、いつていました。

この二つの山のほかに、まだまだたくさん山の山がつながっていて、春には、やわらかい草や木が青あおと風にそよぎます。

しめりけのおおい谷間には、野生のチューリップがさき、赤やきいろのまめランプをばらまいたようにみえます。

その谷をのぼっていくと、くきのみじかいきいろのサフランや、うすむらさきのスミレなどにあいます。

ダニールカは、しよっちゅう山から花をつんでかえりました。けれど、フェージャのほうは、花をつむのがすきでないともえて、山の上へのぼりつくと、さっそく、はなしがいにしてある馬のほうをながめるのでした。

もし、馬番のイワンおじさんが、馬を村までつれていくてくれ、といいつけようものなら、おおよろこびです。馬



のあつたかいせなかにまたがって、きゆうな
山道^{やまみち}をいつきにかけていききました。フェ
ージャにとって、これほどたのしいことはあ
りませんでした。

ところが、ダニールカときたら、おかしな
子で、馬^{うま}は、そばによるのさえこわいのです。

でも、ふたりがなによりもすきなのは、海^{うみ}
でした。春^{はる}になって、青^{あお}い水がほんのすこし
でもあたたかくなってこようものなら、村^{むら}の子
どもたちはみんな、さっそく、入^いり江^えにで
かけて、およいだり、もぐったりするのです。

もちろんフェージャも、およいだり、もぐったり、
をおったり、海^{うみ}が、ちよつとあれたりすると、すぐ、
波^{なみ}のりをしてあそんだりしました。

ダニールカのほうは、波^{なみ}うちぎわでチャプチャプやるのがすきなのです。海^{うみ}の中にはい
っても、こしのところまでつかって、海^{うみ}のそこに海草^{かいそう}がはえていないか、それとも、海草^{かいそう}

のしげみの中になにかいないか、さがしました。

海藻^{かいそう}はみどりいろでやわらかく、波^{なみ}にゆらゆらゆれています。すいしよのようにすみきった水の中に、まるで、みどりの草^{くさ}はらがしげっているようでした。

このフェージャとダニールカは、大^{だい}のなかよしです。でも、もうすこしでけんかわかれをしてしまうところでした。

まだ日がくれたばかりなのに、フェージャがベッドにもぐってねようとしていると、おかあさんがいました。

「このところ、海^{うみ}があれで、ものすごい大波^{おおなみ}よ。海^{うみ}なりの音^{おと}って、すてきね！」

「へえー、なにがいいのかしらね。」と、フローシャおばさんが、いいかえしました。フローシャおばさんは、フェージャのおとうさんのいもうとです。「あけても、くれても、ザンブ、ザンブと、ちっともやすむまもありやしない。うるさくて、まったくいやんなっちゃうわ！」

（いやになんかならないや。）と、フェージャは、いつてやろうとおもいました。（海^{うみ}のあれる音^{おと}って、たのしいじゃないか……。）